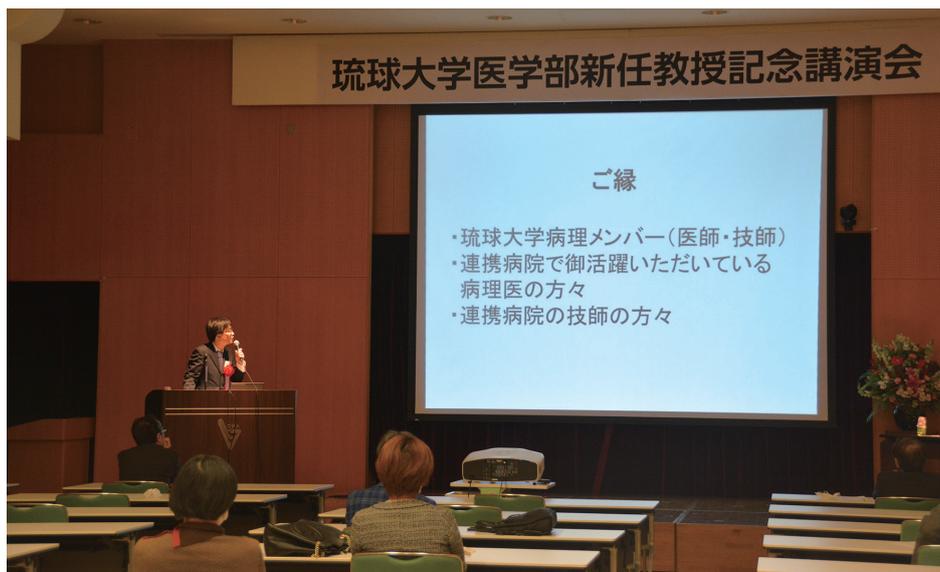


琉球大学医学部新任教授記念講演会



常任理事 稲田 隆司



去る1月25日(木)、本会館にて琉球大学医学部新任教授記念講演会を開催したので報告する。

本会と琉球大学の関わりは長く、昭和59年より琉球大学医学部の先生方に理事としてご就任頂き、琉球大学と沖縄県医師会のパイプ役として重要な役割を担って頂いている。

本会としても本県の医療界全体の発展のために琉球大学医学部と本会の更なる緊密な連携は不可欠であると認識しており、新たに教授としてご就任された先生方と本会会員との親睦を図るため、講演会並びに懇親会を開催した。

今回は、清水雄介教授(形成外科学講座)、高槻光寿教授(消化器・腫瘍外科学講座)、和田直樹教授(腫瘍病理学講座)のお三方をお招きし、会員との親睦を深めた。

記念講演会では、清水教授より「琉球大学形成外科のこれまでとこれから」、高槻教授より

「沖縄で今までやってきたこととこれから」、和田教授より「琉大病理部門の紹介と沖縄での病理学研究につつまして」と題し、講座の特徴や研究内容についてご説明頂いた。

その後、会場を移して先生方を囲んでの懇親会が開催され、祝宴が和やかに行われた。



懇親会

講演

①「琉球大学形成外科のこれまでとこれから」



琉球大学大学院医学研究科 形成外科学講座
清水 雄介 先生

私は琉球大学に新設された形成外科の診療科長として2015年2月に沖縄に着任しました。診療としては主に頭頸部再建、乳房再建、リンパ浮腫、先天奇形などの治療に取り組んでまいりました。琉球大学病院の一診療科であった形成外科は2018年4月に講座化され、琉球大学大学院医学研究科形成外科学講座となりました。私は診療の傍ら、医療機器開発、再生医療研究を行い、産官学連携事業を進めてまいりました。

■医療機器開発

2012年にコードレスライト付筋鉤を着想し、宮崎県の安井株式会社と共に開発を進めました。同社と共同で国内、海外の特許を取得し、経済産業省、AMEDから予算を獲得し、様々な試験を経て2017年に「koplight」として上市しました。2018年からは韓国で販売開始、2019年には台湾、タイで販売開始され、現在は欧州・中国への展開を進めています。

■再生医療研究

私が2015年に琉球大学へ赴任した後に再生医療研究を開始しました。まずは琉球大学に新しく建設された細胞培養加工施設を効率的に

活用する方法を模索し、2016年3月に顔面陥凹性病変に対する培養脂肪幹細胞移植（再生医療第2種）を実施しました。その成果をもとに沖縄県の補助金を獲得し、オルソリバース株式会社と共同で細胞培養キットの開発を進め、2018年に幹細胞を低コストで培養できる生体吸収性ナノファイバーシートを発売しました。また2017年から再生医療産業活性化推進事業として複数のアカデミア・企業と「脂肪幹細胞ストック事業」を遂行し、2024年1月までに148検体の脂肪幹細胞をストックして品質を分析中です。また琉球大学1号ベンチャーとなる株式会社Grancellを起業し、ヒト脂肪幹細胞培養上清液を含むスキンケア製品を開発・販売し、黒字経営に繋がっています。2018年からはAMED事業に採択され、国内初の「産業利用倫理審査委員会」を琉球大学内に設立し、ヒト細胞製剤原料を製薬企業へ供給するプラットフォームの構築を目指して、国・企業と連携を深めています。

■私が大切にしているポイント

産官学連携事業ではパートナーの目的を確実に達成させることが大事です。企業と連携する際には、そのニーズに深く耳を傾け、企業の成長に繋がる成果を出すこと、官が提供する研究費を獲得した際には、その主旨を深く理解して必ず結果を出すよう気をつけています。広い視野をもって協力者のニーズを吸い上げ、本質を見極め、新しいイノベーションを起こせるようなプロジェクトを遂行し、社会に還元することを目指しています。琉球大学全体の発展につながればよいと考えています。

PROFILE

学歴

1998年 3月 慶應義塾大学医学部 卒業
 2006年 4月 慶應義塾大学大学院医学研究科
 博士課程（外科系形成外科学）入学
 2010年 10月 慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程
 所定単位取得退学

職歴

1998年 5月 慶應義塾大学医学部 研修医（形成外科学教室）
 2000年 1月 栃木県立がんセンター 頭頸科 レジデント
 2001年 5月 平塚市民病院 外科 専修医
 2002年 5月 立川病院 外科 専修医
 2003年 5月 静岡赤十字病院 耳鼻咽喉科 嘱託医師
 2004年 5月 済生会宇都宮病院 形成外科 医師
 10月 済生会中央病院 形成外科 医師
 2005年 6月 慶應義塾大学医学部助手（形成外科学）
 2006年 6月 国立成育医療センター 形成外科 医師
 2007年 6月 静岡赤十字病院 形成外科 副部長
 2010年 5月 慶應義塾大学助教（医学部形成外科学）
 2012年 4月 慶應義塾大学講師（医学部形成外科学）
 2014年 8月 慶應義塾大学准教授（医学部形成外科学）
 2015年 2月 琉球大学医学部附属病院 形成外科 特命教授
 2018年 4月 琉球大学大学院医学研究科
 形成外科学講座 教授
 2019年 4月 琉球大学病院
 病院長補佐（イノベーション・広告担当）
 2020年 9月 琉球大学病院 みらいバンク長 現職

②「沖縄で今までやってきたこととこれから」



琉球大学大学院医学研究科 消化器・腫瘍外科学講座
 高槻 光寿 先生

私が琉球大学消化器・腫瘍外科の教授として着任してから4年半が経過した。当科は消化器外科（上部消化管・下部消化管・肝胆膵）、乳腺内分泌外科、小児外科と広い領域をカバーしている。着任して今まで行ってきたこととこれからの展望を紹介する。

【上部消化管】

主に食道と胃の疾患を担当している。沖縄県は胃癌が少なく、食道癌が多い。食道癌の手術は頸部～胸部～腹部にわたり、心大血管や肺門に近接するため難易度が高い。当初は開胸・開腹で手術を行っていたが、2018年より胸腔鏡を用いた低侵襲手術（VATS-E）を導入した。症例数は倍増し、手術合併症が少なく化学療法をスムーズに導入できるためか、全国と比較しても成績良好である。胃については癌の手術だけでなく代謝・減量手術を導入した。沖縄では生活習慣に伴う高度肥満症例が多く、内科治療に抵抗性のものに手術する機会が増えている。

【下部消化管】

主に結腸と直腸の疾患を担当している。結腸癌・直腸癌は全国的に男女ともに急増している疾患であり、ここでも低侵襲手術である腹腔鏡手術を行っている。高度進行直腸癌に行う骨盤内臓全摘術も腹腔鏡で行い、良好な成績を得ている。また、近年主に臓器血流や腫瘍の局在を検出するICG蛍光法をリンパ流にも応用することに着目し、症例を集積しているところであり、今後過不足のないリンパ節郭清に応用できると期待している。最先端手術として、da Vinciによるロボット支援手術も開始した。

【肝胆膵】

肝・胆道・膵の疾患を担当している。この領域は特に高い専門性が要求され、日本肝胆膵外科学会が規定する高難度手術数が、私が着任して以降3倍に増加した。手術そのものはもちろん、手術適応の判断も難しいことが多いため、大学に集約すべきと考えている。2020年より不可逆性の末期肝疾患に対する生体肝移植を導入し、現在までに26例に施行した。原疾患は全国と同様にアルコール性肝硬変が最多で、生存率は85%と、これも全国と同等である。1型糖尿病に対する脳死膵移植施設にも認定され、登録患者が発生している。また、この領域でもロボット支援手術を導入し、今後増加していくものと思われる。

【乳腺内分泌】

主に乳腺と甲状腺の疾患を担当している。特に乳癌については、ゲノム診断に基づいた予防的乳房切除術を5例に行い、良好な結果を得ている。また、脳転移などの高度進行癌に対しても、エンハーツ（トラスツズマブ デルクステカン）の使用により QOL の劇的な改善と予後延長効果を確認できた。いずれも大学病院でしか施行できない医療である。

【小児外科】

小児の疾患を担当している。特に新生児外科や高難度手術は特定機能病院である大学病院の役割であり、横隔膜ヘルニアに対する ECMO 併用の根治術など、NICU との協力で極めて良好な成績を得ている。また、小児生体肝移植も5例に行い、全例元気に生存している。

【これから】

全国的に外科医不足が大きな問題となっており、沖縄も同様であるが、着任後12名が入局してくれて医局の雰囲気もだいぶ変わってきた。大学の使命は特定機能病院としての高度医療の提供、研究教育機関としての人材育成と情報発信であり、引き続き診療・研究・教育に尽力しながら沖縄の外科医療の発展に貢献していきたい。

③ 「琉大病理部門の紹介と沖縄での病理学研究につきまして」



琉球大学大学院医学研究科 腫瘍病理学講座
和田 直樹 先生

琉球大学腫瘍病理学講座 / 病理部門の和田直樹です。2002年3月、大阪市立大学を卒業後、一貫して病理医の道を大阪大学および其の主要関連病院、そして、母校の大阪市立大学で歩んでまいりました。2020年8月、琉大腫瘍病理に着任させていただきました。私が選びました病理医ですが、病理専門医は全国で約2,500名、沖縄県で約30名と、直面する業務量に対して専門医数が不足しています。病理医の育成が重要です。琉大の高度な専門性、疑問に思ったことを研究できる環境に、連携病院の御協力を仰げば、豊富で偏りのない症例も十分確保されると考えております。沖縄病理専門研修プログラムの発展、研究環境の整備に努め、魅力ある病理専門医・病理研究者育成機関を目指したいと考えております。

病理部門に関して、御縁が何より大事と考えております。琉大の病理部門業務に加え、教育、具体的には病理総合学習・ポリクリ・クリクラなどでも活躍いただいている琉大病理メンバーとの御縁は勿論、連携病院の多くにおいて病理医・臨床検査技師の方々に御勤務・御活躍いただいております。これら沖縄の病理医・臨床検査技師の方々との御縁を大切にさせていただくことが沖縄の病理を発展させる礎になると考えております。そして、連携病院の病理医の方々との御縁で連携病院から琉大病理へ応援にお来

P R O F I L E

学歴

1994年 3月31日 長崎大学医学部 卒業 (医学士)
1998年 4月1日 長崎大学大学院医学研究科
入学 (臨床系 外科専攻)

職歴

1994年 6月1日 長崎大学移植・消化器 (第2外科) 外科
研修医採用
1996年 4月1日 山口県立総合医療センター 外科勤務
1997年 4月1日 京都大学移植外科 医員
1997年 10月1日 長崎記念病院外科 勤務
2001年 7月1日 台湾高雄長庚記念病院
肝臓外科・肝移植外科 留学
2003年 4月1日 長崎大学移植・消化器外科 医員
2005年 4月1日 長崎大学移植・消化器外科 助教採用
2009年 10月1日 長崎大学移植・消化器外科 講師採用
2015年 3月1日 国立病院機構長崎医療センター
外科医長採用
2016年 4月1日 長崎大学移植・消化器外科 准教授採用
2019年 7月1日 琉球大学消化器・腫瘍外科 教授採用
現在に至る

しいたく人材交流が行われております。この場を借りまして、応援・バックアップに厚く御礼申し上げます。また、琉大病理部と県内主要病院 16 施設との繋がりを、琉大病理部が受託する標本枚数、具体的には、特殊染色、in situ hybridization (ISH) や免疫染色の受託標本枚数で伝えさせていただくと、年間約 8,000 枚となっております [2022 年]。

研究に関して、先ず琉大病院経験症例について述べさせていただきます。CD3 免疫染色陽性、CD56 免疫染色陽性のリンパ腫で、病変部位が鼻に近い場所であり、最初、NK/T cell lymphoma を疑った症例についてです。NK/T cell lymphoma なら教科書的に細胞傷害性マーカーである TIA-1 や GranzymeB の免疫染色が陽性になるはずで、EBV の局在が組織で分かる EBER-ISH も陽性になるはずですが、そうなりませんでした。そうならず、CD4 免疫染色陽性、CD8 免疫染色陰性、CD25 免疫染色陽性、FoxP3 免疫染色陽性となり、HTLV-1 の局在が組織で分かる HBZ-ISH も陽性になりました。成人 T 細胞白血病・リンパ腫 (ATLL) でした。その後、ATLL における免疫表現型の多様性に関する包括的研究を進め、次のような (A) ~ (C) などの知見を得ました [Mod Pathol. 2023 Aug ;

36 (8) : 100169]。 (A) CD3+/CD4+/CD25+/CCR4+ は教科書的に ATLL の典型的な免疫表現型と考えられますが、約 20% の症例はこのパターンに当てはまらないことが判明しました。 (B) CD30・CD15 陽性、FOXP3・CD3 陰性は形態学的バリエーションである anaplastic type と有意に関連していました。 (C) 細胞傷害性マーカー陽性例 (2.6%) などの非典型例が存在することが確認されました。

今後、沖縄の病理部門を皆様とともに発展させてゆきたいと考えており、そして、症例・病理標本に立脚した研究を進めてまいりたいと考えております。この度は貴重な講演機会をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

P R O F I L E

- 2002 年 3 月 大阪市立大学医学部医学科 卒業
- 2002 年 4 月 大阪大学大学院医学系研究科病態病理学 入局
- 2003 年 4 月 関西労災病院病 理科医師 (2 号嘱託)
- 2004 年 10 月 市立堺病院 病理・研究科医師 (専攻医)
- 2007 年 4 月 大阪府立成人病センター
病理・細胞診断科医師 (医員)
- 2007 年 10 月 大阪大学医学部病態病理学・病理診断科 助教
- 2009 年 10 月 大阪大学医学部学内講師兼任
- 2019 年 4 月 大阪市立大学大学院医学研究科
診断病理・病理病態学 講師
- 2020 年 8 月 現職

原 稿 募 集

プライマリ・ケアコーナー (2,500字程度)

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。
奮ってご投稿下さい。

随筆コーナー (2,500字程度)

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。
なお、スポーツ同好会や趣味の会(集い)などの自己紹介や、活動状況報告など、歓迎いたします。